

「病むことについて」再考

——セプティマスの影と貴婦人の嘆き——

廣 田 園 子

Virginia Woolf が1926年に発表したエッセイ “On Being Ill” を特徴づけるのは、時に過剰とも言えるほど茶目っ気に溢れた語り口と、その深遠なテーマのギャップである。13歳での母親の死を契機に所謂「狂気」に陥り、生涯を通じて精神的、身体的不調に苦しめられ続けたウルフにとって、病はほとんど人生と同義の苦難であると同時に、自らの文学の源泉、生の手段としての文学を生み出したものでもあった。Hermione Lee の言葉を借りれば、「彼女の病は彼女の言語となった “Her illness has become her language”」（176）のである。しかし、この病というテーマを取り上げるにあたりウルフが採用したのは、彼女の数多のエッセイの中でもとりわけ饒舌な、重苦しさを排除したトーンである：

Considering how common illness is, how tremendous the spiritual change that it brings ..., it becomes strange indeed that illness has not taken its place with love and battle and jealousy among the prime themes of literature. Novels, one would have thought, would have been devoted to influenza; epic poems to typhoid; odes to pneumonia; lyrics to tooth-ache. But no; with a few exceptions ... literature does its best to maintain that its concern is with the mind; ... (9)

そしてこの軽やかさは、エッセイ全体の内容及び構成をも支配しているかに見える。すなわち冒頭から繰り返し強調される、病に冒された肉体から目を逸らし続けてきた文学の伝統が糾弾され何らかの提言が示されるどころか、

筆者の関心は病人が読むのにふさわしい文学作品の種類へと滑らかに移行していき、その代表として Augustus Hare による貴婦人の伝記を紹介してあつてなく幕切れとなる。¹ 最終的には、病気は通常と異なる文学を必要とする「精神的変化」のみをもたらしものとして片づけられているかのようである。

一見、肩すかしとさえ思われかねないこのエッセイを、しかしウルフ自身は完成当時「自己の最良のものの一つ」と評価しており、² 1930年には250部のサイン入り限定版をホガース・プレスから再出版している。³ 現代の批評家たちもこの捉え難いエッセイの意義について様々な議論を試みており、例えば Jeanne Dubino は、「病むことについて」で語られる病気をもたらし新たな視点が Bakhtin のラブレー論で語られる「カーニバル」に繋がることを検証しつつ、後者の眼目である肉体的要素が前者においては完全なまでに欠如していることを指摘している。一方 Judith Shulevitz は、Susan Sontag が *Illness as Metaphor* (1978) で批判した、病気を「興味深い」ものと捉えたロマン派の伝統と、ウルフの議論とを重ね合わせている。⁴ 確かにこのエッセイは結局のところ、文学における病の具体的描写の不可能性を是認しているのだが、本作の持つ奇妙な磁力はウルフが軽やかな語り口の下で、病気を触媒として肉体と精神の二分法を瓦解させていることに由来する。前年に出版された傑作 *Mrs Dalloway* で試みた「狂気」の表象を本作に密かに織り込むことで、ウルフは病は肉体のものであるという前提を疑問視し、自らも苦しみ続けた精神と肉体を横断する病に対する哲学を読者に示しているのではないか。本稿では、『ミセス・ダロウェイ』に登場する帰還兵 Septimus Smith のシェル・ショックに関する検証を軸に、「病むことについて」が提示する「病」の独自性を考察し、そのアンチ・クライマックスな結末が示唆するものは何かを明らかにしていく。

1

「病むことについて」で取り上げられる病気は多岐に亘り、インフルエンザ、チフス、肺炎、歯痛に始まり、頭痛、悪寒、座骨神経痛、不眠が列挙さ

れる。まず注目すべきは、先に引用した冒頭部分からも明らかなように、ウルフがこれらの雑多な病気及び症状に対してほとんど雑駁と言えるほど公平なアプローチを保っていることである。例えばソントグの議論が、まず隠喩として使用される病気の細かな選別から始まるのとは対照的に、ウルフは愛する兄 Thoby の命を26歳にしてあっさりと奪ったチフスも、歯痛も、肺炎も、病の深刻さの度合いによる差異化を図ることを一切放棄したまま、同じだけの苦しみを人間にもたらす「病気」という同じ枠に入れて語り続ける。このようなウルフの姿勢を、個々の病の具体的な描写を退け、あくまで病気を抽象化して捉えた証と批判することも可能だろう。しかしウルフの徹底した平等主義の底には、全てのチフスの苦痛は恐ろしく、全ての歯痛は取るに足らないといった一般化に対する反発、そして同じ病名だけでひと括りにすることへの不信が強く感じられる。

“I am in bed with influenza” —but what does that convey of the great experience; how the world has changed its shape; the tools of business grown remote; ... —the experience cannot be imparted and, as is always the way with these dumb things, his own suffering serves but to wake memories in his friends' minds of *their* influenzas, *their* aches and pains which went unwept last February, and now cry aloud, desperately, clamorously, for the divine relief of sympathy.

But sympathy we cannot have. Wisest Fate says no. (12: ウルフによる強調)

ここで強調されているのは、例え病名が同じであれ各病人の経験が如何に隔たっているかという点であり、その個性豊かな病人たちが陥るディスコミュニケーションの世界を、ウルフは「原生林」に例えてみせる: “There is a virgin forest in each; a snowfield where even the print of birds' feet is unknown. Here we go alone, and like it better so. Always to have sympathy, always to be accompanied, always to be understood would be intolerable” (14)。

更に重要なことは、ウルフの病に対する平等主義が「身体的な病」と「精神的な病」の差異化をも拒否しているという事実である。精神に専念し肉体を軽視してきた文学の伝統の数少ない例外として、ウルフは Marcel Proust の作品と Thomas de Quincey の *Confessions of an English Opium Eater* (1821) を挙げるのだが、一般的には特に後者が「病に冒された肉体」に関するテキストの代表になるとは考え難い。確かにド・クインシーのテキストには胃痛やクシャミ等の身体的症状も僅かに言及されるが、その中心はあくまでアヘンによって誘発される夢、幻想及び精神異常であり、そもそもアヘン中毒をチフスや肺炎と同じ「病氣」という範疇に入れることは異例と言えよう。精神を自らの領域と心得て、病氣及び肉体を軽視する文学の伝統を批判するという形を表面上は取りながら、実は病、肉体、精神という三者の従来の定義を巧妙に歪ませていくウルフのディスコースの傾向は、次の例でも顕著である：

People write always of the doings of the mind; its noble plans; how the mind has civilised the universe.... They show it ignoring the body in the philosopher's turret; ... Those great wars which the body wages with the mind a slave to it, in the solitude of the bedroom against the assault of fever or the oncome of melancholia, are neglected. (10)

ここでもウルフは一見何気なく「熱病」と「鬱病」を並置し、その初期に「孤独な寝室の中で、肉体がその奴隷である精神と繰り広げる壮絶な戦」が歯痛と同様に文学においては無視されている、という主張を繰り広げていく。しかし熱病患者と鬱病患者の「肉体の戦」を同一視することもまた、一般的には異例と言わざるを得ない。そして明らかに、議論の主役の座をいつの間にか独占するのは、この鬱病患者の孤独な「戦」なのだ。

ウルフは次第に空の移り変わりに驚嘆し、バラの花を注視し、詩集に読みふける実に個性豊かな「病人である我々」の描写に没頭していく。これらのイメージからも明らかなように、「脱走兵」(14)、「無法者」(19)と形容さ

れる、社会からの逸脱者であるこの病人の描写は、多くの点で『ミセス・ダロウェイ』におけるセプティマスを連想させる。⁵ 具体例を挙げてみよう。

In illness words seem to possess a mystic quality. We grasp what is beyond their surface meaning, gather instinctively this, that, and the other—a sound, a colour, here a stress, there a pause—which the poet, knowing words to be meager in comparison with ideas, has strewn about his page to evoke, when collected, a state of mind which neither words can express nor the reason explain. (19)

この段落の結びとして、ウルフは “The Chinese must know the sound of *Antony and Cleopatra* better than we do” (19) と述べる。一方『ミセス・ダロウェイ』において、セプティマスが「隠れたメッセージ」を見出すのもまた『アントニーとクレオパトラ』である。

Here he opened Shakespeare once more. That boy's business of the intoxication of language—*Antony and Cleopatra*—had shriveled utterly. How Shakespeare loathed humanity—the putting of clothes, the getting of children, the sordidity of the mouth and the belly! This was now revealed to Septimus; the message hidden in the beauty of words. The secret signal which one generation passes, under disguise, to the next is loathing, hatred, despair. Dante the same. (75)

ここでセプティマスがシェイクスピアの言葉の影に見出すのは、音声的特質というよりも恐るべき「シグナル」であるのだが、言語の通常の意味を超えた「神秘的な性質」を読み取る病人たちと彼の類似が示唆するように、「病むことについて」で描き出される「病人」のディスコミュニケーションと精神的変化は、狂気と紙一重の場所に位置している。このエッセイを最初に掲載した *The New Criterion* の編集者であった T. S. Eliot が、この作品に対して冷淡な反応を示したことはよく知られている。⁶ リーはその理由を「病むこ

とについて」が、他のエッセイに比べ“more personally revealing”(448)であったためと解釈しているが、確かにこのエッセイにおける「病人」は、頁が進むごとに一般的な病人から離れ、明らかにセプティマス、更にはウルフ自身が抱える狂気へと近似していくのだ。

2

それではここで、「病むことについて」の前年に出版された『ミセス・ダロウエイ』における病、とりわけセプティマスのシェル・ショックの描写について検証していきたい。本作においても、ウルフが病気の「個性」を追求し、病名による一般化を拒絶していることは明らかである。主人公クラリッサ・ダロウエイを襲った「インフルエンザ」と当時世界中で猛威を振るった所謂スパニッシュ・インフルエンザとの関連は曖昧であり、「インフルエンザ」が冒したのは彼女の「心臓」なのか、「心」なのか、あるいはそもそも「インフルエンザ」は隠喩に過ぎず、彼女の諸症状を生み出しているのは過去のトラウマなのか、これらの問いに答えを見出すこともまた不可能である。⁷そして何よりも、クラリッサの「ダブル」である第一次世界大戦の帰還兵セプティマス・スミス精神の「病」がシェル・ショックであったのか否かも、実はテキスト中で明確には示されていない。Kylie Valentine が指摘するように、セプティマスの「狂気」は戦場の恐怖や悲惨というよりはむしろ、それらを感じることを容赦しない英国社会によってもたらされており(128)、テキスト中で鮮明に描写される彼の苦悩に満ちたヴィジョンは典型的なシェル・ショック患者のものとは趣を異にしている。敵兵ではなく戦死した上官の幻覚に苦しみ、小鳥がギリシャ語で歌うのを聞き、自らの狂気への恐れに駆られるセプティマスの「病」は定義されないまま、「個」としての彼のキャラクター表象の中核を成し、そして彼の死と共に封印される。

そもそも大戦に参加した軍関係者の間に蔓延した深刻な身体的症状を伴う神経症⁸を指す用語として1915年に誕生した「シェル・ショック(砲弾神経症)」という語の不正確さは早くから問題視されていた。患者の中には爆撃

に全く晒されていない者も多数存在し、砲弾の炸裂という物理的な現象が神経に影響を及ぼすという説は速やかに説得力を失っていたのだ。しかし1922年に英国陸軍省が発表した *Report of the War Office Committee of Enquiry into "Shell-Shock"* は、冒頭からこの用語が誤解を招く不適切な表現であることを強調しながらも不承不承の是認を与えている（“[U]nfortunately its use had been established and the harm was already done. The alliteration and dramatic significances of the term had caught the public imagination, and thenceforward there was no escape from its use”[5]）。勿論 Elaine Showalter が指摘するように、政府及び軍当局にとっても実はこの曖昧な病名がもたらす効用は歓迎すべきものであった（172）。激しい戦闘の象徴である「砲弾」によるショックは、女性の病であるべき「ヒステリー」とは全く別物であるという幻想を、この語は正に体现し、一般社会に喧伝し得る力を持っていたのである。

ウルフが『ミセス・ダロウェイ』を執筆していた当時、シェル・ショックという言葉がその問題性にもかかわらず広く人口に膾炙していたことは明らかであるが、彼女は“war neurosis”等の類似表現も含め、生前のセプティマスに病名を与えることを避けた。そこに、自らも「狂気」を経験し様々な治療に晒されてきたウルフの、「患者」でも「症例」でもないセプティマスの「個」を尊重しようとする切実な思いを見ることは容易である。しかし一方で、セプティマス本人と彼の妻を前にしたブラッドショー医師が、彼の状態をひと目見て診断を下しながらも、表面的にはその症状について断言を拒む時（“Sir William said he never spoke of ‘madness’; he called it not having a sense of proportion”[82]）、病名の欠如は「個」の尊重とは全く異質な社会体制の無能力を象徴している。ヴァレンタインは“*Mrs Dalloway presents a custodial struggle over the terrain of mental science, but foregrounds the individual patient as the victim of this struggle*”（131）と指摘しているが、確かにここに反映されているのは既存の科学的・医学的ディスコースから零れ落ち、俄かに勃興した精神科医たちの恣意的な治療に身を委ねざるを得なかった数多の所謂シェル・ショック患者たちの姿なのだ。

『ミセス・ダロウェイ』のテキストにおいて、セプティマスの病は当時の精神医学においては「健全さ“sanity”」を巡るディスコース全体の矛盾を如実に示している。19世紀後半から勢いを増してきた優生学やダーウィン主義に関する議論の中で、社会的枠組みに適応しない者たちに対する「科学的考察」は熾烈を極めていた。William Greenslade が指摘するように、肥大する都市の中で顕著になってきた社会的秩序に反する種々雑多な「他者」——無政府主義者、狂人、暴徒、娼婦、芸術家、同性愛者——の逸脱行為の原因を探ろうとする議論の多くは遺伝的決定論にその鍵を見出し、これらの行為を病理学的な異常と解釈する傾向にあった(18)。こうした生物学的解釈に異議が唱えられるのはようやく戦間期に入ってからであり、言うまでもなくこの変化をもたらした最大の要因は第一次世界大戦にある。約20万人とも言われるシェル・ショック患者を抱えた英国は、遂に精神の病が遺伝的病理とは無関係に、あらゆる階級において起こり得るという事実を認めざるを得なかった。

1920年前後に発行されたシェル・ショックに関する研究書には、戦争を「楽しむ」ことができない「不健全」な精神がなぜここまで蔓延したのか、という根本的な矛盾に満ちた問いかけに対する適切な答えを必死に模索する帝国の姿が浮き彫りになっている。彼らのディスコースの特徴としては、まずシェル・ショックの特殊化が挙げられる。前述したように、女性の病であるヒステリーは勿論のこと、“insanity”とシェル・ショックの境界も譲れぬ一線であった。『陸軍省委員会による「シェル・ショック」に関する調査報告書』では、病理学的な異常である前者と一過性の「ショック」である後者という区分が強調されている。深刻な症状が長期間に亘って続いた場合、それは戦争がなかったとしても起こり得た早発性痴呆と見なされ、シェル・ショックの範疇からは外された(Report 144-5)。更にもう一つの特徴としては、シェル・ショックの原因として患者本人の生物学的退化傾向が根強く指摘され続けていたことである。例えば John T. McCauley は1918年出版の著書の中であるシェル・ショック患者の症例を紹介する際、次のように指摘

している：

Although he had never had any neurotic symptoms, he showed a tendency to abnormality in his make-up. He was rather tender-hearted and never liked to see animals killed. Socially he was rather self-conscious, inclined to keep to himself, and had not been a perfectly normal, mischievous boy, but was rather more virtuous than his companions. He had always been shy with girls and had never thought of getting married. (7-8)

患者の内向性、ひいては同性愛的傾向を強く暗示することによって患者の生来の“abnormality”を強調し、シェル・ショックへの親和性を示唆する彼の主張が、19世紀から続く退化の言説を反映していることは一目瞭然である。

最先端の科学技術の粋を結集した大量殺戮である戦争を“the highest degree of normality” (McCauley 34) を要求する状況として奨励する社会にあって、不適応者たちは“abnormal”という烙印を押される他はなかった。第一次世界大戦中、公に戦争批判を行った Siegfried Sassoon の治療に当たったことで有名な精神学者 W. H. R. Rivers は1920年出版の著書の中で“these disorders became explicable as the result of disturbance of another instinct, one even more fundamental than that of sex—the instinct of self-preservation” (5) と述べているが、このようにシェル・ショック患者の人間としての根本的な、悲痛なまでの正常さを指摘する意見が政府見解の主流となることはなかった。戦間期に俄かに注目を浴び政治的権力を握り始めた精神学者たちの多くは、戦場の凄惨さに耐えられない「異常者」の病根を特定し、正常化することに自らの存在意義を見出すこととなり、彼らが繰り出す新奇な治療法や対策の中にはそれ自体ほとんど病的と言えるものすら存在した。⁹

国家レベルで「正常」と「異常」の境界が恣意的に操作されていた大戦中及び戦後の矛盾に満ちた「狂気」を巡るディスコースを、『ミセス・ダロウェイ』は鋭く糾弾している。セプティマスの病名の不在は、彼の「個」を守る手段であると共に、彼と同じく大戦がもたらした多種多様なトラウマに苦し

みながら「狂気」「退化」「異常」の範疇をたらい回しにされた無数の「シェル・ショック」患者たちの苦悩を象徴するものでもある。壮絶な殺戮、更にはそれを若者に強制する社会の「異常」という明白すぎる原因を取り除くことはおろか認めることすら不可能な状況の中で、患者となることを拒否したセプティマスに残された道はただ窓から身を投じることのみであったのだ。

3

それでは、このように時代が生み出した凄惨な苦悩を背負ったセプティマスの影を「病むことについて」の病人に見出す時、このエッセイの奇妙な幕切れを我々は如何に解釈すべきなのだろうか。読者は後半において、いきなり「二人の貴夫人の生涯」に放り込まれることになる。この1893年に出版されたヘアによる伝記物語は、「微熱に苦しむ人々」(20)の友として紹介され、ウルフは長々とキャニング伯爵夫人シャーロットとウォーターフォード侯爵夫人ルイーザの生涯を語り始める。そして落馬して死亡した夫の葬儀の日のルイーザの描写でもって「病むことについて」の幕は唐突に閉じられる：

She knew [her husband's death] before they told her, and never could Sir John Leslie forget, when he ran downstairs on the day of the burial, the beauty of the great lady standing to see the hearse depart, nor, when he came back, how the curtain, heavy, mid-Victorian, plush perhaps, was all crushed together where she had grasped it in her agony. (23)

この結びについて、Dubino は「ヴィクトリア朝の三流小説家のプロット」にも似た凡庸な語りで最後を飾ることによって、ウルフが病気のもたらす「精神的変化」の美化を妨げ、このエッセイ本来の「ユーモア感」を打ち出していると述べている(42)。しかしここで注目したいのは、この型破りな「病」に関するエッセイが「死」で終わっているという事実である。既に見てきたとおり、本作に登場する病気は致死的であるか否かという点は無視され、また精神的な病と身体的な病の差異も意図的に排除されている。更には

「病人」の精神状態のみがクローズアップされる中、肉体が病に蝕まれた結果、死に至るという普遍的事実は言わば本作の範疇外に位置している。ウルフが病気の一般化を拒み、病気の伝達不能性を強調する以上、ここで語られるのはウルフ自身の経験——彼女固有の病歴、すなわち彼女固有の「狂気」——に根ざした「個人的な病」に他ならないのだ。2010年出版の *Madness in Post-1945 British and American Fiction* には、次のような一節がある：

Madness is uniquely individual and thus a 'true-to-life' characterisation... refers either to a clinically identifiable, 'realistic' representation of mental illness, or to the singularity of life itself. Fiction writers do not seek clinical precision or standardisation; instead, they describe and depict the experience of experiences. (19)

ここで“madness”と“illness”を置き換えれば、この文章は正に「病むことについて」のディスコースに合致する。ウルフによる病の表象は、ここで示唆されているとおり臨床的正確さや規格化を意図しておらず、従って病人の意識として一般的と考えられる死への恐怖などは全く言及されぬまま、“the singularity of life itself”のみが強調される。

それ故に、この「個人的な病」の世界の終幕に死が侵入するのは、読者にとって意表を突かれることである。ウルフはここでも、ある一つの病気に特別な意味を与えないよう、落馬によってもたらされる事故死を巧妙に選択している。そして絶命した本人の落馬による傷、苦痛、そして迎える死の具体的描写は完全に欠如しており、読者に与えられるのは夫の柩を見送る妻ルイーザの姿のみである。しかもその彼女の姿は傍観者サー・ジョンによって中継されているのだ。夫の突然の死に直面する妻の心情もまた全てテキストから締め出され、ルイーザが握りしめたカーテンのビロード地のしわだけが彼女の悲哀を表している。ウルフは「病人である我々」が読書を通じて、二人の貴婦人の人生にいつの間にか没頭していく様を語る：“the charm steals upon us imperceptibly; by degrees we become almost one of the family” (21)。

ディスコミュニケーションの原生林の中で「狂気」に近似した精神を抱える「病人」が、夫を亡くした妻の嘆きに対峙する場面で、このエッセイは結ばれる。

ウルフがここで提示しているのは、病人たちのディスコミュニケーションからの不完全ながらも一つの解放であり、それをもたらした文学の力ではないだろうか。肉体を排除してきた文学を批判するという形式を取りながらも、セプティマスの狂気に深く彩られた「病人」たちの孤独な精神に分け入った本作は、結末においてやはり文学を通じて他者の生、他者の死に対峙することの可能性を示唆している。夫を亡くした妻が握りしめたカーテン地のしわという、コミカルなまでに身体から隔たった「文学における死」が結末で提示しているのは、特定の病気の具体的描写とは対極のところでは他者の生、そして死を実感させる文学の力であり、身体、精神を問わず「正常」から逸脱しディスコミュニケーションの原生林を彷徨う「病人」たちに届き得る言葉によって喚起されるイメージの力である。軽やかな語りによって思いがけない結末まで導かれてきた読者がその行程を振り返る時、『ミセス・ドロウェイ』にも匹敵する深遠なメッセージを見出す驚きこそが、「病むことについて」をウルフの数多のエッセイの中でも類を見ない傑作として位置づけているのだ。

注

本稿は平成26年度文部科学省科学研究費補助金（基盤研究C）による研究成果の一部である。

- 1 Lee はこの移行を “On Being Ill... begins by saying how rarely illness is a subject for fiction, turns into an account of reading in illness” (402) と評している。
- 2 1925年12月7日の日記に、ウルフは “*On Being Ill*—an article which I, & Leonard too, thought one of my best” (D3 : 49) と記している。しかし後述するとおり、T. S. Eliot の批判を受けてこの自信は揺らぐことになる。
- 3 D3 : 306参照。ちなみに本作は2002年に Paris Press によって新装版が出版されている。
- 4 Lorraine Sim は、ソントグが批判した従来の隠喩をウルフは異なる目的のために再利用していると主張し、Shulevitz に反論している。

- 5 Maria DiBattista もその著書において、セプティマスと「病むことについて」の病人の関連を指摘し、狂気と芸術の境界について考察している（50-2）。
- 6 このエリオットの反応について、ウルフは日記に“[Eliot] is not enthusiastic; so, reading the proof just now, I saw wordiness, feebleness, & all the vices in it”（D3 : 49）と記している。
- 7 クラリッサと彼女のインフルエンザに関する議論は、拙稿「隠喩としてのインフルエンザ？——ヴァージニア・ウルフと「スペインの貴婦人」」（遠藤不比人他編著『転回するモダン：イギリス戦間期の文化と文学』研究社、2008年。pp. 310-22）を参照。
- 8 Wendy Holden はこの症状の多様性を“from total paralysis and blindness to loss of speech, vivid nightmares, hallucinations and memory loss”と列挙し、“Some patients declined eventually into schizophrenia, chronic depression and even suicide”と述べている（7）。
- 9 陸軍の新兵に施された“hate training”では、戦場の恐怖に備えるために新兵たちは屠殺場で動物の血を浴びせられた。これらの行為は後に「あまりにもサディスティックである」として禁止されたと言う（Holden 92）。

引用文献

- Baker, Charley, et al. *Madness in Post-1945 British and American Fiction*. Basingstoke: Palgrave Macmillan, 2010.
- DiBattista, Maria. *Virginia Woolf's Major Novels: The Fables of Anon*. New Haven and London: Yale UP, 1980.
- Dubino, Jeanne. “On Illness as Carnival: The Body as Discovery in Virginia Woolf's ‘On Being Ill’ and Mikhail Bakhtin's *Rabelais and His World*.” *Virginia Woolf: Emerging Perspectives: Selected Papers from the Third Annual Conference on Virginia Woolf*. Ed. Mark Hussey and Vera Neverow. New York: Pace UP, 1994. 38-43.
- Greenslade, William. *Degeneration, Culture and the Novel*. Cambridge: Cambridge UP, 1994.
- Holden, Wendy. *Shell Shock*. London: Channel 4 Books, 1998.
- Lee, Virginia. *Virginia Woolf*. London: Chatto & Windus, 1996.
- MacCurdy, John T. *War Neuroses*. Cambridge: Cambridge UP, 1918.
- Report of the War Office Committee of Enquiry into “Shell-Shock.”* London: His Majesty's Stationary Office, 1922.
- Rivers, W. H. R. *Instinct and the Unconscious*. Cambridge: Cambridge UP, 1920.
- Showalter, Elaine. *The Female Malady: Women, Madness and English Culture, 1830-1980*. London: Virago, 1987.
- Shulevitz, Judith. “The Poetry of Illness.” *The New York Times*. 29 Dec. 2002, late ed. 19.
- Sim, Lorraine. “Ailing Dualism: Woolf's Revolt against Rationalism in the ‘Real World’ of *Influenza*.” *Woolf in the Real World: Selected Papers from the Thirteenth International Conference on Virginia Woolf*. Ed. Karen V. Kukil. Clemson: Clemson U Digital P, 2005. 88-93.
- Sontag, Susan. *Illness as Metaphor and AIDS and Its Metaphors*. New York: Picador, 1989.
- Valentine, Kylie. *Psychoanalysis, Psychiatry and Modernist Literature*. Basingstoke: Palgrave

Macmillan, 2003.

Woolf, Virginia. *The Diary of Virginia Woolf*. Eds. Anne Olivier Bell and Andrew McNeillie. 5 vols. Harmondsworth: Penguin, 1979 – 85.

... . *Mrs. Dalloway*. Ed. David Bradshaw. Oxford: Oxford UP, 2000.

... . “On Being Ill.” *The Moment and Other Essays*. 1947. New York: Harcourt Brace & Co, 1975. 9 – 23.